
恋の魔法を唱える王様

wktk

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋の魔法を唱える王様

【Nコード】

N9338Z

【作者名】

w k t k

【あらすじ】

人々が夢見る大舞台、王座杯。その決勝戦で敗れた少年は、自分に勝ち女王となった女の従者になった。一般人の常識を大きく無視した規格外たちに囲まれ、少年は自分を見失うことなく頑張っているのかなんとか。そんな少年の苦悩と挫折と栄光を描けたらいいなあと思う今日この頃な物語。

第一話「始まりは決勝戦」（前書き）

段落のつけ方とか情景描写とか、いつもと違う感じで書いていきます。残酷な描写が無いとは言いきれませんが、極力書かないつもりです。基本ほのぼのです。ハッピーエンド希望です。脱力系希望です。

第一話「始まりは決勝戦」

空を見上げる。

今日という日を祝うかのような、どこまでも澄み渡る青い空だ。

ワアアアアアアアア！！！！

もつとも、せつかくの快晴もこの大歓声の中では、気分を落ち着かせるには至らないらしい。
むしろなんでこんなに晴れてるんだよと八つ当たりしたくなってしまふ。

「あーあ、場違いだよなあ………僕」

軽い現実逃避気味にぼやく。ぼやきでもしないと、とてもじゃないけどやっていけそうもなかった。
確かに、自分で望んで参加したことではあるのだけど。まさかこんなことになるなんて。

「さあ、五年に一度行われるこの“王座杯”もいよいよ大詰めとなりました！」

この大会の司会の男が拡声器を通して声高に叫ぶ。

そう、今日は何を隠そう、王座杯の決勝戦なのである。

王座杯　それは、簡単に言えば『王様を決めるための武闘大会』だ。

この国では五年に一度、王が代わる。この王座杯を勝ち抜いた人がその年から五年間、王の名を冠するということになっており、他の国から見て異常とも言えるこの仕組みはなんと建国から六百年続く伝統なのだ。

もちろん五年間しか王の位に座せないから、王がこの国の権限すべてを取り仕切るということはない。王として出来ることと言えば、

常識の範囲内でほんの少し特例を作ったり、その期間の国の指針を決めたりといったお遊び程度のことだ。実質この国の王とは『一般国民の夢見る絢爛豪華な生活を体験できる仕事』というような認識になっている。

しかし、ある程度勝ち上がれば褒賞が貰えるし、運良く優勝できればその後の人生は保証される。怪我をする危険はあるが、死ぬことは無い。旨い話には裏があるものだが、国が主催する行事とあつては疑いようもない。

豪華で贅沢な暮らしを夢見て、国中から腕に自信のあるものが集まる。参加するその人数はおよそ一万人。なんと全国民の十分の一が参加するのだ。

それで、何故か僕はその決勝戦にいた。

「さて、今大会の優勝者となり、これから五年間王者として国民の尊敬と羨望を一身に受けるのはどちらの選手なのか!? まずは竜の門から、小柄な容姿に隠された膨大な魔力　シャインフォード・キリングル選手です!!!」

名前を呼ばれ、舞台の中央に向かって歩いていく。途端に、今までの比ではないほどの大歓声が響き渡った。

「うおおおおおおおおお!!!」

「チビすけー!!!　応援してっぞー!!!」

「シャイナちゃん頑張ってー!!!」

拡声器の近くに居るのか、それとも自ら拡声の魔術を使っているのか判らないが、いくつかの音が他大勢の歓声よりも目立っている。僕の名前はチビすけじゃない。あと、なに勘違いしてるか知らないけどシャイナは女の子につける愛称だ。

むっとして声が聞こえた方を振り返るが、この観客の中から個人を特定するのは果たして無理である。

しかたなく、応援のつもりらしい声に手を振って応じる。案の定爆

音のような歓声が返ってきた。
もうやけくそだ、ちくしょー。

「続いて虎の門、多種多彩な剣技を持つ瞬輝の女性剣士 シオン・
ウエルネフィア選手です！！」

明らかに僕の名前が呼ばれたときよりも更に大きな歓声が起こる。
どうやら、向こうの方が人気が高いらしい。

（それもそうだよな。女性の剣士が本選に残るのって、大会初らしいし。ましてや決勝なんて）

そもそも、女性剣士は男性剣士と比べてほとんどいない。力と速さがモノを言う剣士において、女性が男性に勝ることはとても難しいのだ。

一体、どんな豪傑が来るのだろうか。

僕は怖いもの見たさのような気分をもって、相手が舞台上に上がってくるのを待った。

実のところ、相手がどんな選手か見たことがないのだ。

名前くらいは聞いているが、彼女が試合のときは僕も試合だし、控室で顔を合わせる機会もない。闘技場の選手控え室とは言え、流石に男女は別に部屋を設けているのである。

次第に高まる大歓声と共に、相手の選手が舞台端の選手控えから姿を現した。

彼女の姿を目にしたとき、僕はたぶん、ポカンと口を開けていた。
もしかしたら、息を呑んでいたかもしれない。

（う、うわぁ……綺麗な人……）

そこには、はっと目を見張るような美しい女の人があった。

女の人、と言ったのは彼女が僕よりも少し年上に見えたからだ。
遠いのにハッキリ分かるほど整った顔立ちと、黒真珠のように引き込まれるような艶のある長い髪。髪は動きやすいように括り上げている。

綺麗というには止まらず、年若さに相応な可愛らしさも兼ねている。
正直言って、今まで出会った女性の中で一番綺麗な人だと思う。

(なるほどね……こりゃ、人気もでるわけだ)

この大歓声にも納得。むしろ、これで騒がない方が不思議になるくらいだ。それくらい、彼女は魅力的に見える。

失礼ながら、まじまじと彼女を見つめる。対戦相手なのだから、それくらいは許してもらえはらず。許してもらおう。

それにしても華奢な身体つきである。明らかに僕よりは身長が高いが、この細身で果たして剣が振れるものだろうか。

彼女が戦っている姿というものが全くとって良いほど想像できない。

うーむ……、と悩む僕。すると、僕の視線に気付いたのか、彼女は先に舞台上がっている僕の方を見た。

「……………!!」

その瞬間、彼女は大きく目を見開いた。

何かに物凄くびつくりさせてしまったようだ。が、なんだろう。

もしかしたら、僕と同様に対戦相手についてほとんど知らなかったのかもしれない。

(確かに、僕の外見も見れば驚くよなあ)

自分の足元に目を落とす。

僕としては見慣れた光景だが、世間一般的に見れば相当地面が近くに感じるだろう。

なにせ、僕は17歳と今大会最年少の本選出場者であり、更にその年代の男の子と比べてもとても小柄なのだ。

決勝戦まで勝ち上がってくる男を屈強なモノと想定していれば、見当はずれもいいとこだ。どこからどう見ても子供が来るのだから、ビックリするのも当然だろう。

子供と戦ってるみたいで調子狂うだろうなあと不憫に思う。今までの試合でも変に手加減をされたことがあったし。

でもまあ、こっちも同じようにビックリしたし、それは痛み分けってことで。

「では、両者前へ!!」

司会の男の人の言葉に従って、舞台の真ん中近くまで歩み寄る。僕は魔術師だからホントは遠距離から戦い始めたいんだけど、一対一では中距離から遠距離にかけて魔術師に利がありすぎるのだ。攻撃手段の有無が問題になるのだが、大会側としては始まりから差が付いているという状況は好ましくないだろう。近距離ではその差は逆転してしまうのだけど、剣士と違って魔術師は近距離でも戦うことは出来る。走れば数秒と経たず潰されてしまう距離まで近づいて、試合開始の合図を待つ。

そこで僕は自身に寄せられる強い視線に気付いた。

「……ん？」

顔を上げる。が、彼女は視線がぶつかる前に目を逸らしたらしい。対戦相手として向かい合う彼女は、明らかに不自然な様子で中空を睨んでいた。

目が落ち着かなく動いていて、チラチラとこちらの様子を伺っていることが分かる。これで隠そうとしているのなら、この人絶対に嘘が下手だ。

対戦相手なんだから、相手を観察するのは自然なことだと思うんだけど。気が弱いわけでもないだろうし、なんで目を逸らすんだろう？首を傾げる僕は、もう一つあることに気付いた。

（あれ？ この人 ）

カアアアアアアアン

と、そこで会場中に響き渡る、歓声に決して負けない大きな鐘の音が鳴った。

思わず、考えていたことが頭の中からすっ飛んで消える。

この合図は

「試合、開始だー！！！」

司会の男の人の絶叫を皮切りに、王を決める大会

王座杯の決勝

戦は幕を開けた。

第二話「二日後の登校」

決勝戦から二日後、僕は久しぶりに学校に登校した。

本当は昨日も学校があったのだけど、王座杯の出場者には一日休養の許可が出ていたのだ。

怪我はなかったけど、のんびりできたことで大会による疲れを癒すことは出来た。

だけど、

「なあ、シヤナたん。ふてくされてんなって」

午前の授業が終わり、昼食の時間。

ポテトサラダをはさんだサンドウィッチを食べながら、ラズは僕に言う。

彼の名前はラズライム。僕の友人の一人で、僕と同じ魔術科に在籍している。成績は間違いなく上の方で、中肉中背というよりも少し筋肉質。くすんだ赤髪がトレードマークの世話焼きである。

「僕はシヤナたんじゃないし、ふてくされてもない」

「嘘をつけ、嘘を」

ラズは嘆息を一つ。

「どこの誰がどう見ても不機嫌だろ」

「……んぐ」

机をはさんで座る僕は、ぐでーっと机にもたれかかりながらサンドウィッチを頬張った。

中身はラズと同じくポテトサラダ。このポテトサラダは、学生食堂特製の逸品なのだ。

そんな僕を見て、ラズは出来の悪い弟を見るかのように眉根を寄せ
る。

「行儀悪いぞ」

「うるさいな、もう」

悪態を吐きつつ、身体を起こす。

面倒見が良いのがラズの取り柄ではある。

でも、こんなときくらいそっとしておいてくれてもいいのに。

「僕は今、こうしたい気分なんだよ」

「悔しいのはわかるけどさ。終わったことは仕方ないだろ？」

「別に悔しくなんてないってば」

「決勝戦まで順調だったのに、まさか決勝戦で自滅して終わるんだもんなあ」

「……」

確かに、昨日行われた決勝戦において、僕は惨敗とも言えないような酷い負け方をした。

開始直後、突進してくるシオンさんにびっくりして足をもつれさせ、そのまま尻餅をつくように勢いよく転倒のだ。

元々運動神経の悪さから剣術科に進むのを断念した僕である。転ぶと分かっているにもかかわらずに受け身が取れるはずもなく、とても強かに頭を打ってしまい意識を失った僕は、救護室で自身の負けを知らされたわけだ。

最高潮の盛り上がりを見せる会場は、思考が追い付かないほど呆気なく終わった戦いに一瞬にして静まり返ったらしい。

僕としても、これ以上言及したくない話なのに、

「……僕を慰めてんのか、傷をえぐってんのか、どっちかハッキリしてくんない？」

思い出したくもない失態を挙げるラズに、僕は侮蔑の目を投げかけた。

勝手に一人で納得していた彼は、途端にあたふたし始める。

「え、あ、いや！ 違っつてー!!」

「あ、バカ、大声出すなよ……っ」

「誤解だつてばシャイナ!!! ホントに!!!」

「注目されるだろっ」

少しだけ大きな声でいさめる。

僕の声で我に返ったラズは、周りの人間がギョツとして僕たちに注

目しているのに気づき、静かに着席した。

恥ずかしそうに赤に染めた顔を落ち着かせるためか、オレンジジュースを一口含む。

「……じゃあ、なんでそんなに不機嫌なんだよ？」

集まった視線に、必要以上に声を抑えるラズ。

「そりゃあ」

僕は言いかけ、辺りを見回した。

教室の内から、外から、ちらほらとコチラを見物している人が目に入る。

「こんな状況で、誰が気分いいかっての」

「なんだ、そんなことか」

ラズは呆れたように僕を見る。

集まる視線が全部先ほどの一件のせいかと言うと、そうではない。

実は、今日一日中ずっとコレなのだ。

大会決勝まで勝ち進んだ僕は国中から注目を集めた。

この国の王を決める大会だ。もしかしたら王になっていたかもしれないのだから、注目されないわけがなかった。

当然、それはこの学校においても例外ではない。

登校時には校門に入る前から人垣が出来ていたし、授業中にも移動中の生徒が教室の窓から様子を覗いてきたりした。逃げ込んだトイレでもジロジロと観察される始末。

そんなこんなで気の休まる場所があるわけもなく、自然と僕の機嫌は傾いていくのだった。

「こんなの、やる前から分かったことじゃん。そもそも、退屈な日常を変える為に参加した大会だろ？」

「それはそうだけどさー……」

もう一度、辺りを見回す。

食堂は広い。が、そこにいるそこに居る全員がご飯を食べに来ているわけではない。

ご飯を食べていれば、目は食べ物の方へ向く。たくさんの視線とぶ

つかるといふことは、この人数分は確実にご飯を食べていないといふことである。

その中に、目が合ったことが嬉しいのか机の向こう側から手を振る女の子がいた。

「……………」

苦笑いを浮かべながら、手を振りかえず。

ざわめく食堂。

もうほとんど阿鼻叫喚。

キヤー！つと黄色い声で騒ぎ立てる彼女たちを後目に、僕はこっそりと溜め息を吐いた。

「なんか、違う……………」

「贅沢言っつなつて。願いが叶っただけマシだろ」

「こんなことなら参加しなければよかった……………」

元の日常が恋しい。

数日前までは確かにそこに平穩があつたのに。

ああ、懐かしき日々よ。

「……………いや、前もそんなに平穩ではなかったけどな。あちこち駆け回つて、無駄に人の目惹いて、それで厄介ことも引つ張つてくるんだからよ。まったく、自分の知らないところでどんだけ騒がしかつたか……………」

「ん、なんか言つた？」

「なんでもねえよ、……………つたく」

現実逃避を止めてラズに目を戻すと、彼は頬杖について微妙に怒つていた。

場所が学生食堂でなければ唾でも吐き出しそうだ。「けつ」とかりアルに言いだしそんな雰囲気である。

「うん？　なんでラズまで不機嫌になつてんだよ。僕、なんかしたか？」

「……………。……………うわあ、流石にちよつとイラツときた」

「え、ちょ、あれ？　なんかマズイこと言つちやつた？」

ていうかなんで拳を握りしめてんの？

あまつさえ振りかぶって　って、ちよつと！

「一発だけ、一発だけで良いから」

「待って、待って！　落ち着いて！！　暴力反対！！！」

その後、正体不明の不機嫌に駆られたラズと全力疾走の鬼ごっこを繰り広げた僕は、意味の分からない慰謝料としてコーヒーを一杯おごらされることになったのだった。

「では、今日は昨日の続きからやっていきます」

午後の授業は、魔術？の科目から始まった。

僕が在籍している魔術科の授業は、基礎科目以外の特別教科はすべて魔術に関して割り当てられる。

代表的なもので言えば、魔術？、魔術？、魔術？などがそうだ。魔術？の授業では魔術に関する基本を学び、魔術？では特に呪文について学ぶ。

そして、今回の授業である魔術？は魔方陣について学ぶ授業だ。

「土系の初級魔術と、中級魔術、上級魔術。それぞれ一つずつ魔方陣を模写して、この授業中に提出してください。教科書を見ても、図書室の本を借りてきても構いません」

どうやら今日は実習のようだ。

図書館という言葉聞いた途端、そわそわし始める生徒が現れる。

図書館に行つて良いということは、この教室を出ても良いということである。

大方、テキストに描いてどこかでサボる気だろう。やる気のない奴らめ。

「分かっているとは思いますが、絶対に魔力は込めないこと。良いですね？」

そんな生徒たちを見て、先生はいつもの注意事項を言う。

この注意事項は魔術？の授業を受講した時から、耳にタコが出来るほど聞かされている。

「何故かと言つと、魔方陣に魔力を込めると魔方陣として機能してしまふからだ。」

「魔術を行使するためには、まず魔方陣を描く必要がある。といつても、魔方陣の模様が描ければ誰でも魔術が扱えるのかと言つと、そうではない。魔方陣を模写したとして、それだけではただの模様でしかないのだ。」

「では、魔術を発動できるようにするにはどうするか。その答えは簡単で、魔方陣を描くときに魔力を込めればよい。」

「魔力を込められた線で描かれた模様は、そこで初めて魔方陣として機能する。後はその魔方陣に適切な呪文を唱えてやれば、魔術は発動できる。」

「よつて、魔術師になれるかどうかは、魔方陣を描けるかどうかで考えられることが多い。」

「では、始めてください」

先生の号令に、生徒たちが一斉に動き出す。

多くの生徒は教科書を持って教室を出たようだけど、僕は席に座つたまま動かなかった。

「図書館に行きたい気持ちもあるけど、行って何をするわけでもないし。」

「どっか行かぬーの？」

自分の道具を抱えてきて、ラズは僕の隣の空いた机にそれを下ろした。

持ってきたのは紙と、筆と定規、あとは教科書だけ。

「魔方陣にとって重要なのはその模様とそこに込められる魔力だから、実際媒体は何でもいいんだけど、ラズはそこに敢えてこだわりを持って筆を使う。」

「このこだわりが成績の良さに現れてるのかな、なんて思つたりしてしまう。僕が使つてるのは学校指定の製図用のペンだし。」

「まあ、僕の場合は製図用のペンじゃないと模写なんか出来ないっていう切実な理由があつたりするんだけど……。」

「どこで描いても同じかなって。それに、皆出て行ったからここも静かになったしね」

教室にはもう、僕らの他には数人しか残っていないかった。あとは先生がのんびり椅子に座って提出を待っているだけだ。

この時間も好奇の視線に当てられ続けるのかと思っただけど、そもそも教室の皆は毎日顔を合わせている友達ばかりだ。半日もすれば観察するのにも飽きたらしい。

確かにな、とラズは教室の中を見回した後、隣の席に腰を下ろした。

「ラズもここで描くの？」

道具を広げ始めているラズに問いかける。

「ああ。シャイナもいるしそうしょっかなって思ってるけど」

「別に僕に付き合わなくてもいいよ？ 僕魔方陣描くとき一切しゃべらないし、ラズは図書室の方が良いでしょ？」

優等生のラズは、少しでも複雑な魔方陣に慣れるようと、図書室の“魔方陣大全”という本をよく読んでいる。

魔方陣大全は多くの偉大な魔術師たちが編み出した魔術の魔方陣が詰め込まれており、それを見れば現在この世界で使われている魔術の全てが分かると云われるほどの書だ。

普段から色々な魔方陣を目にすることは難解な上級魔術を会得する手がかりになると、先生も推奨している。

一方、教科書に載っているのは誰でも知っている有名なものだけだ。彼には物足らないはずである。

ラズは苦笑して首を横に振る。

「いや、今のシャイナを放っておく方が心配だよ。気が付いたら、また人波に飲まれてるかもしれないし」

「……」

僕は黙り込んだ。

彼の言うとおり、今朝、学校に着いた時にはひどい目にあった。

これでもかかってくらい揉みくちゃにされ、正直、彼が助けてくれなければペチャンコになってしまうところだった。

王座杯準決勝者の国立専門学校二年生が、興奮した学生たちに囲まれて圧死しました。なんて、最低の笑い話だ。それは何としても避けたい。

「……じゃあ、一緒にいてくれる？」

「うん、ボディガードは任せとけ」

僕の不安げな様子が面白かったのか、彼はくすくすと笑いながら、紙を広げる。

その横顔は爽やかな優男そのものだ。

(こつこつという気配りに惚れる女の子がたくさんいるんだろつなあ……) 彼を横目で見ながら、僕もラズにならつて魔方陣を描くための準備を始めた。

魔方陣の模写が出来上がったのは、それから一時間くらい経ってからだだった。

「出来た？」

描き上げた三枚の紙をまとめ、隣を向く。

「んー……まあ、これで良いかな」

ラズは教科書と自分の模写を見比べ、満足げに頷いた。

ふう、と一呼吸おいて、ラズは僕に顔を向ける。

「そつちも出来たみたいだな」

「うん。……まあ、こんな出来栄だけど、一応」

僕の机の上には、何度も描き直してクシャクシャになってしまった紙があった。

そのシワのせいで魔方陣が酷く読み取りづらい。が、まだ今日のは綺麗な方だ。

「相変わらず不器用だな」

僕の紙を見て苦笑するラズ。

そんな飾らない性格の彼に、僕も苦笑して応える。

「でも、今日のはまだ綺麗な方なんだよ？」

「へーえ？ どれどれ……」

身を乗り出してじつくりと僕の紙を観察し始めた彼は、次第に眉根を寄せていった。

「問題は、それに先生が気付いてくれるかどうかなんだけど」

「……厳しいだろうな」

「うん、だろうね」

僕もそう思う。

綺麗と言っても、せいぜいいつもより折り目が2、3本少ないだけだし。

魔方阵の命はその模様にある。媒体は関係ないとは言え、模様の邪魔になるようなシワがあると、魔方阵は上手く機能しなくなるのだ。そのため、僕のようにシワくちな紙を提出する生徒には、学校では低い評価しか与えられない。

「魔方阵なんて、誰か他の人に描いてもらえれば良いんだけどな」

「それこそ無理な話だよな」

また、魔方阵を他の誰かに描いてもらうということは不可能である。何故かと言うと、魔術を行使する際に必要となるもう一つの鍵。呪文にも魔力を込める必要があるからだ。

魔方阵に込められた魔力は、それを込めた本人の魔力にしか反応しない。

つまり、他人の魔力が込められた魔方阵にいくら呪文を唱えようと、魔術は発動しないのだ。

「この時間は模写だけだし俺が描いてやってもいいんだけど……」

「それだと、僕の為にならないでしょ？ いつもラズが言ってる」

「惜しいよなあ……。王座杯で決勝まで進めるような魔術師が、学校の基準じゃ評価がもらえないなんて」

ラズがぼやく。

面倒見の良い彼は、学校での僕の評価が気に入らないらしい。

でも、学校の評価は適当なもので、実際僕に魔術師としての力はほとんどない。

魔術科にだって、魔力があるということだけで仕方なしに入れても

らえたところなのだ。

除籍されないだけ感謝しなければならぬ。

「仕方ないよ。僕が不器用なだけだし、戦いの最中だったらコレよりもっと酷い魔方陣になっちゃうもん」

「でも、戦えてはいるじゃんか。なんとたって決勝進出だぜ？」

決勝進出、という言葉を出すたびにラズは不満げになる。

もしかしたら、僕よりも彼の方が僕の成績にこだわっているかもしれない。

「戦えてる、っていうのも微妙なところだけだね。僕の戦い方って、いわゆる“外道”ってやつだし」

「それがムカつくんだよなあ……！ ちょっとくらい正規の魔術じゃなくたって、大目に見ろってんだよ！」

「いやいやいや、正規の魔術じゃないって、それ魔術科に属してる僕を完全に否定してることになるから」

魔術師として評価を得る、という当初の目的はどうなったんだ。

「もういつそのこと、魔術科なんて辞めちゃうか？」

「勝手に辞させないでよ。魔術科辞めたら僕の居場所なくなるじゃん」

本気で考えているらしい彼に、僕は呆れてツツコみを入れた。

運動神経や手先の器用さなど、持って生まれた肉体の性能が低い僕は、何でもそつなくこなすラズと違って他に行くところがないのだ。

「僕から魔力とったら、何も残らないんだからさ」

だから、僕が魔術科を辞めることなんて、無いと思ってた。

そう、少なくとも、この時まででは。

第三話「放課後の話し合い」

午後の授業も終わり、後はホームルームで先生の連絡を残すのみとなった頃。

「おい、あれ見るよ!!」

窓際でぼーっと外の様子を眺めていた男子の一人が、突然声を荒げた。

なんだなんだと、窓際の生徒は一斉に窓の方へ向く。

「んー……? って、アレもしかして!？」

「うわっ!! すごい!!」

「本物だよな!？」

皆が皆、興奮して窓にへばりついていく。

様子から察するには、相当に有名な人が何かが見れたようなのだ。表現があいまいで何が何やら一切伝わってこない。

次第に、生徒たちは騒ぎに便乗して窓に固まり始めた。先生も騒ぎの原因が何か知るため、窓の外を窺っている。

「うおーッ!! シオン・ウエルネフィア様だ!!」

「え、マジかよ!?! お前らちよつと見せろ!!」

「結婚してくださいー!!」

そこでようやく、問題の人物の名前が挙げられた。

なんか約一名、堂々と婚約を申し込んでいるバカがいたけれど。

「え?」

その名前を耳にした瞬間、僕は自然と腰が浮いていた。

“シオン・ウエルネフィア”といえば、僕にとっては今一番タイムリーな名前である。

廊下側の窓から一番遠い席に座る僕は、どうせ乗り遅れるからと座って動かなかつただけで、相手が相手だけに思わず反応してしまつた。

身体の小さい僕は、迷いなく窓の端の一番人の少ないところへ向か

う。

近づいてくる僕に気づいた同級生の友人が、僕の入れるスペースを開けてくれた。気を利かせてくれたようだ。

目礼で「ありがとう」と告げて、僕も皆と同様に窓にへばりつく。

「……」

そこには、一昨日見知ったシオンさんの姿があった。

ゆっくりと校門から歩いてきて、僕たちのいる校舎の方へと向かっている。周りにいるのは王宮の騎士だろうか。

戦いの場ではないからか、決勝戦のときよりも雰囲気や和らいで見える。

あのときは女性らしくあってもどこか格好いいな、というような印象を抱いていたのだけど、今ではすっかり深窓の佳人といった様子だ。相変わらず綺麗なものには変わらないのだけど。

「それにしても、なんでこの学校に？」

「なんだろうねえ。もしかしたら、母校に報告しに来たのかもよ？」

僕の疑問の声に、友人が憶測で答える。

さりげなく口にされた事実には、僕は驚いて振り返る。

「えっ！？ シオンさんって、この学校出身だったの！！？」

「ええっ！？ 知らなかったの！！？」

初耳だ。

シオンさんはなんと、この学校出身だったらしい。

驚愕を持って訊き返すと、その友人には何を今更と言った風に逆に驚かれた。

「私たちが一年生だったとき、シオンさんはまだ学校に居たんだよー？」

「……え、ホントに？」

しかも、一年間も同じ学校に通っていて気づかないとか。

あの美貌だ、一度見れば忘れられないはず。とすれば、僕は彼女を一度も目にしていないことになる。

奇跡的な確率で出会わなかったのか、それとも僕の行動範囲が狭す

きたのか。

「ホントに知らなかったの？ 見たことも？」

「……うん、まったく……」

「ええー……？」

驚きを通り越して次第にテンションが下がっていき、彼女の僕に向ける目は、少しずつ何か可哀想なモノを見る目が変わっていった。

「シャイナちゃん……。こっ、どこまでも世間に逆らっていく感じはいいけどさあ、少しは知っておいた方が良くもあるんじゃない？」

「僕としては逆らっている気はなくて、むしろ流されているつもりなんだけど……」

「シオンさんのこと、何も知らないって時点で異端だよ？ 分かってる？」

「……」

まずい。口調が説教をするようなものになっちゃっていつてる。

空気が芳しくない方向へ向かっているのを感じ取り、僕は逃げるように目を窓の外へ戻した。

窓の外のシオンさんは既に校舎に入るところまで近づいており、僕らのいる4階からは見えづらくなってきた。

と、

「……」

シオンさんは突然立ち止まり、視線を上を持ち上げた。

「あ、こっち見てる！」

「ヤバイ俺ドキドキしてきたー！」

「シオン様あゝ……！！」

今朝僕がしたように、それだけで歓声が上がると。

が、シオンさんはそんな騒ぎには我関せずといった様子で視線を彷徨わせている。

誰かを探しているんだろうか。

シオンさんはちょうど僕らのいる階に視線を向けているようで、僕

は目が合ってしまった心地がした。
というよりも、

「……………」
「……………」
あれ？ 睨まれてる、ような…………？

背筋が寒くなるような視線を投げかけられた気がしたのだけど、それも少しのことで、すぐに視線を戻し、さっさと校舎の中に入って
いってしまった。

「……………」
「……………」

騒然とする教室の中、無言になる僕と友人の二人。

「なんか、こつちを見て睨んでた気がするんだけど……………」

「……………さあ、気のせいじゃない？」

この大人数の中で、具体的に誰を睨んでいたなんて分かるものか。
向こうも誰がいたとか、そんなの分かるわけがない。

「シャイナちゃん……………」

「……………気のせいだって」

だいたい、僕が睨まれる理由とか、一つくらいしか心当たりないし。
こういうものは、気にしたら負けだと思っただ。

「ねえ……………絶対、睨んでたよね……………？」

「……………」

だから、気にしたら負けなんだってば。

その後、ある程度落ち着きを取り戻した頃合を見計らって先生が号令をかけ、今日の授業はすべて終了した。

同級生がそれぞれ友達と教室を出ていく中、僕とラズの二人だけが教室に残る。

シオンさんが怖くて顔を合わせたくなかったのもあるが、理由としては皆が一斉に帰る時間帯を避けるためだ。

もし今朝のようなことになってしまうと、今度こそ僕は潰れてしま

う。

「それにしても、シオンさんが学校に来るなんてな」

「ビックリしたよね」

話は自然と、先ほど現れたシオンさんのことへ。

「騒いでるから何かと思ってみてみれば、なんか物騒な連中がいるんだもんな」

ラズはふと、窓の方に目を向けた。

多分、シオンさんの護衛について言っているのだと思うけど、物騒な連中とはちよつと酷い。

ここが剣術科の校舎であれば、袋叩きの目に遭うのは確実だ。

「あれつて、王宮の騎士たちだね？ 王宮の外に居るところなんて、僕初めて見たよ」

「ああ、普通セレモニーとかで見るときには、着飾ったりしてて判りやすいからな。あーというのが、本来の正装なんだろうさ」

王座杯が行われた後、優勝者が王宮に“王”として入る前には、王位継承のセレモニーがある。

都市に住む国民たちは皆こぞつて王宮に集まり、新たなる王の誕生を祝う。僕たちが王宮の騎士を目にする機会なんてそれくらいのもので、この学校の剣術科に通う生徒たちはほとんどそのセレモニーを見て騎士に憧れ、剣術科を希望するのだとか言われている。

まあ確かに、美しい甲冑を身に纏った騎士たちが一斉に行進する様は絵画のような美しさがある。

騎士に憧れて剣術科を志す気持ちは、男としてよく分かるものだ。

「でもさ、王位継承のセレモニーって明後日だろ？ 王宮の騎士なんか護衛につけて、こんなところに居て良いんだか」

「そりゃあ、やることいっぱいあるだろうね。でも、ここにもやることがあつて来たんじゃないの？」

僕は知らなかったけど、一年前までこの学校に居たらしいし。

卒業生が王座杯を制したとあれば、学校側も連絡を入れただろう。もしかしたら、シオンさんを招いた講演会が計画されるのかもしれない。

ない。

いや、十中八九されるだろう。なにせシオンさんは学生たちの間でも絶大な人気を誇るカリスマだ。生徒の意欲向上にはうってつけである。

「やること、ねえ」

呟いて、思案顔になるラズ。

「なんか引つかかるんだよなあ……」

「なにがさ？」

「いやな、さつき話してるやつがいたんだけど。シオンさん、どうも職員室に行ったらしいんだよ」

誰が見に行つたんだよ。

あの時はまだホームルームの時間だったはずだろ。そいつ絶対騒ぎに乗じて抜け出してるじゃん。

「王様としてシオンさんを迎えるんなら、校長室に招くべきなんじゃないかな」

「でも、恩師とかいるかもしれないし。個人的にお世話になった人がいるのかも」

職員室に行つたことが、そんなに不自然なのだろうか。

先生たちのほとんどが常駐している職員室に行くことは、そんなに変なことではないと思うけど。

僕が思いつきで理由を挙げると、ラズは首を横に振って否定した。

「それはあんまり考えられないんだよなあ」

「なんで？」

「シオンさんって成績は学年でもトップだったんだけど、天才肌で学校の授業はあんまり参加してなかったらしいし。何しろ先生たちより強かったから、先生たちもとやかく言えなかったんじゃないかな」

「先生たちより強いつて……」

なんかスゴイな。

ラズの話によると、シオンさんは学校じゃ向かうところ敵なしの存

在だったらしい。

魔術科でも立ち向かえる人が居なかったという圧倒的な強さを見せつけ、先生たちからも半ば放置されるように卒業していったのだそうだ。一体何しに学校に来ていたのか。

「だから、仲のいい先生が居たはずがないんだよ」

「ふうん……」

学校では友達と共に過ごし、先生からは持て余される。

成績の面で見れば比べ物にならないけど、何か少し親近感がわくな。

「じゃあ職員室に何しに行ったのかわかってことになるんだけど」

「どうでも良いけどさ」

「うん？」

「よくそんなにシオンさんのこと知ってるね」

何故か真剣にシオンさんのことについて語るラズに僕は尋ねてみた。僕がシオンさんについて全く知らないとはいえ、ラズが口にするのは、明らかに調べないと知らない情報ばかりだ。

僕の知る限りラズは嗜好きであったりミーハーであったりすることは無い。

「しかもシオンさんのこと話すとき、やけに饒舌だしさ」

なんとなく引つかかるものを感じて、僕はラズに半步分椅子を寄せた。

ラズはしまったという表情を浮かべて目を逸らす。

「ねえ、シオンさんのこと、調べたんじゃなくて元々知ってたんじゃない？」

「……」

沈黙するラズに、僕は質問を重ねて畳み掛ける。

「そう、例えば 昔からずっと見てたから、とか？」

「……シオンさんは学校のマドンナだったからな」

「だから、自分も気になると？」

「……」

沈黙は雄弁なり。

今日はやけにシオンさんの話題が出ると思ったら、どうもそういうことだったらしい。

これは意外な新事実。ラズってばあんまり女の子に興味ないと思っただのに。

「なるほどね。ふーん。へえーえ」

「……なんだよ？」

「学校のマドンナは、ラズのマドンナでもありません」と

「恥ずかしい言い方するな！！ あと、言っておくがあくまでも“気になる”の域は出ないからな！！」

この流れを追って、今更その言葉を信じる人は居ないだろう。

「はいはい、そういうことにしておこうね」

「ああもう、人の話聞いてないだろ！？」

ラズは頭を掻いてうがーっと吠えた。

これでまた一つ、ラズをいじるネタが増えた。

ラズとの激しい主導権争いには最近押され気味だったのだけど、これで盛り返せそうだ。

「あんな、シャイナ！！ 俺がシオンさんのことを知っているのは“常識”の範囲であって」

ガラッ

と、ラズが僕の弱点である“常識”を持ち出して反論を始めようとしていたところで、やけに大きな音を立てて教室の戸が開いた。

僕とラズは思わず言葉を切ってそちらを振り向く。

そして、

「……」

「……」

ぴしり、と空気と共に何かが固まる音がした。

僕とラズの二人は一瞬にして言葉を失う。

噂をすれば影が差すというが、それも時と場合、特に人を選んでほ

しいと思う。

それとも、名のない星は宵から出るとか言うべきだろうか。この方がむしろ、今は正解かもしれない。

扉を開けたそこには、柔らかな雰囲気はどこかに捨て去った冷徹な美女　シオンさんが居た。

「シャインフォールド・キリングル」

「……はい」

「話したいことがあるのだが」

「……えつと……」

高圧的な口調に、思わず口ごもる。

今ようやく、在学中敵対した人がいなかったというその理由が身にしみて分かった。

このプレッシャーを目の前で感じて、どうして敵として再びその前に立つことが出来ようか。

「今、時間はあるか？」

そう言っただけでシオンさんはチラリとラズを見た。

僕も横目でラズを見ると、ラズはものの見事に彫刻と化していた。

まるで一瞬の時を切りとったかのような。シオンさんは石化魔術まで扱えるらしい。

「……はい」

「では、行こう」

返事を聞くや否や、背を向けて教室を出ていくシオンさん。

その背が見えなくなると、僕はこっさりため息を吐いた。

「……マジか……」

正直言っただけで、行きたくない。どう考えても穏やかな空気ではないし、でも、このままじっとしていると、更に酷い目に遭いそうだ。

具体的に言っただけで、真っ赤な花を咲かせる以上のことが。

「行くしかない、よなあ……」

固まったままのラズは置いて、僕は小走りでシオンさんの後を追った。

教室を出ると、シオンさんはずんずんと先に進んでしまっていた。僕も追いかけてようと歩を進めるけど、なにしろ相手は俊足の剣士である。

僕の足では到底追いつかない。……こらそこ、身長之差とか言わない。

ようやく追いついた僕は、少し肩で息をしながらシオンさんの入っていた教室へ続いた。

どうやら、今は使われていない部屋らしい。

僕もシオンさんに追いつくのに精いっぱい、どの道をどう来たのか覚えていない。

どこだろう、ここ……。

「そこに座れ」

「あ、はい」

机を挟んで二つイスがあるうちの一つを指され、それに従って僕は腰を下ろす。

「水しか用意できないが」

「え？」

言われた意味がよく理解できなくて、僕はシオンさんを仰ぎ見る。

シオンさんは面倒臭さを前面に押し出した目で僕を見た。

「水で良いよな、と訊いているんだ」

質問がもうほとんど命令形だ。

「あ、はい……それでお願いします……」

二人になった途端、言葉が更に鋭くなった気がする。

それと反比例して、僕の肩身はどんどん狭くなっていく。

同時に声も小さくなる。もはや風前の灯だ。

シオンさんは黙って備え付けの棚からカップを取り出し、水道から水を注いで机の上に並べた。妙に手際がいいところを見ると、在学中はこの教室を使っていたのかもしれない。

次いで自分も腰を下ろし、その外見に似合う優雅な動作でカップに

口をつけた。

つて、ちよつ!?

そこら辺にあつたカップなのに、なんでためらいなく使ってるんですか!?!?

「どうした?」

「え、あ、いや……」

「毒など入っていないただの水だ。安心しろ」

「……」

そこじゃないです。

むしろその心配なんかしてません。

「だったらなんだ?」

「……あ、う……」

「言ってみろ」

「……いえ、いただきます」

僕もシオンさんにならつて、カップに口をつけて一口水を飲む。

……うん、ただの水だ。どうしようもないくらいただの水だ。

別に僕はどうでも良いんだけどね。これから明後日には王様になるって人が、なんでこんなもんで水道水飲んでるのかつてのが問題なわけよ。

問題の、はず。

あれ? 僕、間違つてないよね?

「……」

「……」

「……」

「……」

訪れる沈黙。

だが、その空気の重さはラズのものとは比べ物にならない。

僕はしかたなく、変な頭痛のする頭でここに呼ばれた理由を考えることにした。

最初に思い浮かぶのは 　　というか、呼び出される原因なんて一つ

しかないんだけど。やはり、先日の大会の決勝が原因だろう。

僕の自滅と言う形で終わったあの決勝戦は、大いに波紋を呼んだらしい。特に、僕を熱心に応援してくれていた人たちは過激な反発をしたそうだ。

例えば、僕の足元付近のコンディションが悪かったのではという意見があったり、あまりにも早すぎる決着に八百長疑惑が浮上していたり、外部の誰かの策略ではないかという噂が立ったり。

申し訳ないことに、その話の内容は勝者であるシオンさんを疑う声の方が大きいようだ。

僕も当事者の一人として色々な話を聞いている。噂に疎い僕の耳にも入っているのだから、シオンさんにもきつと届いているはずだ。騎士としては屈辱だろう。自分は何もしていないのに、勝手に勝者となってしまうっていて、それにケチをつけられているのだから。

決してワザとではないけど、申し訳ない。

でもどうか、正式に決勝戦をやり直したいと言わないで欲しい。このシオンさんのプレッシャーを知ってしまったら、僕はもうシオンさんに対峙することなんてできない。

その結果怖気づいて、また同じ結末を辿ってしまったら、今度こそ偶然では済まされなくなってしまう。

本当に、決勝戦の僕を恨めしく思う。

ああもう、僕はなんであんな重要な場面でこけちゃったんだろう!?

「シャインフールド・キリングル」

「ひゃうっ!？」

まずい。

慣れないフルネームで呼ばれ、思わず変な声が漏れてしまった。

いつもなら友達の誰かがツッコみを入れてくれるのだけれど、今はタイミングが悪い。

ますます重くなる空気。

そんな中、シオンさんはいかに話に入るつもりか、カップを机に置いて僕をじっと見据えた。

さながら死刑宣告を待つ囚人のように、僕は身を固くしてシオンさんの言葉を待つ。

「なぜ、手を抜いた？」

シオンさんは、ギリリと眼光鋭く僕に問いかけた。

その眼光はまるで抜身の剣のようで、僕はそれをど元に突き付けられている心地がした。

「手を……抜いたとは……？」

「とぼけるな」

あまりの重圧に息を詰まらせながら必死で問い返すと、シオンさんはその返答をばつさりと切り捨てた。

「あのとき、お前は魔法を使ったふりをして、私の攻撃を受けようとしただろう」

「やっぱりか。」

数ある決勝戦不審説の中で、シオンさんが信じているのはどうやら八百長説らしい。

シオンさんは僕が戦うことなく、自分から負けたと思い込んでいるようだ。

そりゃちよつとは「王様になったら面倒くさいな」とかは思ってたけど、それでも手加減できるほど僕は器用じゃない。

「いや……あの……」

「お前は魔法を扱うのだろう？ 知っているぞ。なにせ、学校で唯

一の魔法使いだからな」

「……まあ、はい」

シオンさんもこの学校に居たらしいから、僕のことを知っていてもおかしくはないと思ったけど。

僕は知らなかったけど、向こうは僕のことを知っていたらしい。

「立派なもんだ。大会中でただ一人の魔法使い。歴代稀に見る多彩な魔法を使う者。それが学校も卒業していない17歳の少年？ 全く信じられない話だ」

シオンさんはつらつらと言葉を並べていく。

どうしよう……、なんかすごい誤解されてる気がするんだけど、それを解くのが怖い。

僕なんか、魔術師としても半人前以下だし、魔法使いというにもおこがましいものなのに……。

「今大会最速試合記録を打ち立て、しかも今回優勝すれば史上最年少大会優勝記録もあつたじゃないか」

「でも……、大会最年少記録は二十歳でしたから、結局シオンさんが記録を更新したじゃないですか」

「ああ、二つ年下の少年に勝ちを譲られてな」

口に出して嫌な思いがぶり返したのか、眉根に寄ったシワが一層増す。

うう、どんどん空気が険悪なものに……。

何か、何か言わなくては。

「僕は……別に……」

「別に、なんだ？」

「……自分から負けたわけでは……」

「へえ？ 自分から負けたわけじゃない？」

「……」

息をするにも辛い。

必死に弁解しようとしているのだけど、まず口が開かない。

「どの口が言うんだか。決勝戦に来るまで相手の攻撃をただの一つも喰らわずに勝ち進んできた魔法使いサマが、決勝戦は攻撃の一つも喰らわないまま負ける？」

「……」

「そんなの、どう考えてもおかしいだろうに」

「……」

だめだ。

全く聞く耳を持たない。

言いたいことを言えたのだろう、シオンさんは前傾姿勢を解いて深く椅子に腰かけた。

そして、次なる僕の反論いいわけを待っているのか、僕をじつと見据えたまま無言になる。

対する僕は、もう有効な弁解の手段が思いつかないため、何も言葉を発することができない。

「……」

「……」

もしかしたら僕はもう、石化魔法にかけられているのかもしれない。それか、時間停止の魔法だ。きつとこの辺りの時間は、シオンさんによって止められているのだ。

「……」

「……」

「……」

「……はあ」

しばらくの一方的(?)な睨みあい合いの結果、いい加減その沈黙にも飽きたのか、シオンさんは一つため息を吐いてカップに口をつけた。

「シャインフォールド・キリングル」

「は、はいッ！」

再びのフルネーム。

シオンさんは相手の名前を呼ぶとき、フルネームを使う癖があるらしい。

カップを置いたシオンさんは、何か複雑そうな表情で口を開いた。

「お前には、王宮に来てもらう。いいな？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9338z/>

恋の魔法を唱える王様

2012年1月9日05時47分発行